

(社) 東洋音楽学会 西日本支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第69号 (2011年5月25日)

定例研究会のご案内

東洋音楽学会 西日本支部 第253回定例研究会

(日本音楽学会西日本支部第2回(通算353回)例会と合同)

日 時：2011年6月25日(土) 午後2時～5時

場 所：大阪音楽大学 第1キャンパス F号館215教室

阪急電鉄宝塚線庄内駅から徒歩約10分

例会担当：北見 真智子(大阪音楽大学)

小泉文夫音楽賞受賞記念講演

チャールズ・カイル(ニューヨーク州立大学バッファロー校名誉教授)

(講演タイトルは未定)

博士論文発表

1. ストラヴィンスキーのバレエ《ミューズを率いるアポロ》における音楽と振り付け —— リトミックとの関連に焦点をあてて
上羽 義信(京都市立芸術大学)
2. 「吹奏楽」という世界 —— 戦後のコンクールを中心に
戸田 直夫(大阪大学)

* * * * *

定例研究会の記録

東洋音楽学会 西日本支部 第250回定例研究会

日 時：2011年1月10日（月・祝） 午後1時半～4時

場 所：国立民族学博物館 第4セミナー室

例会担当：福岡 正太（国立民族学博物館）

《映像上映と討論》

インドにおける音楽芸能の映像記録 —— オリッサ州の事例を中心に
アラギリスワミ・サーランガラージャン氏（映像作家）

〈報告〉

本定例研究会は、人間文化研究機構の連携研究として国立民族学博物館がすすめている、「映像による芸能の民俗誌の人間文化資源的活用」プロジェクトと合同開催された。音楽や芸能といった無形文化を研究する上で映像記録をいかに活用するか、その可能性の検討を主旨として、インドの映像作家であるアラギリスワミ・サーランガラージャン氏を招き、氏の製作した映像作品の解説・視聴が行われた。

南インドタミルナド州の国立機関で映像の製作技術を学んだサーランガラージャン氏は、フリーの映像作家・カメラマンとしてポピュラー音楽や西洋音楽などさまざまなジャンルの仕事に携わりながらも、伝統芸能への高い関心を持ち続けてきた。1980年代から南インド古典芸能やコンサートの撮影およびアーカイヴ作成を行い、オリッサ州の山岳民族・トライバルに関する NGO の開発プロジェクトに加わった1993年以降は、彼らの生活様式、文化、社会的文脈、開発による近代化が環境に及ぼす問題などを、映像メディアを用いて世界に発信している。

まずインド各地で行われた4つの芸能が、それぞれ解説と3分ほどのクリップによって提示された。ナーガスワラム（ダブルリードの縦笛）を裸足で立ち歩きながら演奏する78歳の男性、ストリート民族劇の革新を試みた女性のパフォーマンスなど、芸の場における中心的存在を主に追った映像はその音楽芸能の輝きと熱気を確かに伝えてくれた。しか

し、例えばデリーで撮影したというスーフィー祝祭行事の映像では、カメラはカッターリーを詠唱する少年を上目遣いに捉えて動かない。少年のもとに投げ込まれる金銭の意味あいについてフロアから質問があったが、カメラを動かすことのできない私たちには、行事における少年のポジションはわからない。映像はあくまでも撮影者による「世界の抽出」である。四角く切り取られた映像を見るとき、私たちはフレームの外にある広がりや、捨象された膨大な情報を、意識せずにはいられない。全体を通して、サーランガラージャン氏からテキストへ向けられるまなざしが強すぎる印象を受けた。

続いて本題であるオリッサ州の少数民族に関するプロジェクト、トライボロジーの概要説明および映像の解説と視聴にうつった。1993年からNGOの活動としてトライバルの人びとを撮影し、2003年インドで開かれたワールドソーシャルフォーラムを契機に『Tribology』というアルバム（歌、デジタル画像、ビデオクリップの3枚組み）を製作し発売したという。ここではトライバル民族であるポルジャの人びとが伝える音楽とスネークダンス、口琴を演奏する女性、伝統的な生活を保守するボンダというトライバル集団の踊り、ポルジャの少年たちの遊びと歌、以上の4事例が紹介された。スネークダンスは社会的な場で行われる芸能で、乾燥カボチャでできた一弦楽器を爪弾き拍子を刻む歌い手の男性たちの傍で、緑、赤、青などのカラフルな衣装で身を包んだ女性たちが横並びし、隣合う人の背中に腕を回して隊列を組む。乾いた赤い地平に足の裏の皮膚をリズムカルに這わせながら、隊列は気ままに右回りの弧を描く。同様の軌跡で緩やかに歩む男性ら。それを撮るカメラもまた揺れ動き、演者のリズムと同期する撮影者の身体が感じられる。芸態を効率的に収めたプレゼン映像としても秀逸な作品であり、また他の3事例も魅力的に編集されている。だが、どれも芸能が行われる前後の文脈が切り取られているため、音楽芸能をスタティックに浮遊している存在と捉えているように思われかねない。

質疑応答でのフロアの関心は、やはり映像製作の各段階における意図というトピックに集中した。撮影自体を行うか否か、撮影にあたって何を撮り何を撮らないか、編集時のシーン取捨選択基準など、全ての過程

に影響するサーランガラージャン氏を含む製作者側の関心／無関心の境界を見定めるための質問が多く投げかけられた。それに対して氏は、カッワーリーをうたう少年であれトライブル民族であれ、映像作家として現場の全てを逃さずに記録しているが、本研究会の音楽芸能というテーマや発表時間の都合などの事情に鑑みこのようなかたちで公開をした、と答えた。トライボロジーのプロジェクト自体が芸能に特化したものではないため、作品全体（3枚のディスク及び書記情報）で補完的にトライブルの社会生活を描く構成になっているのだという。

また、新たな人間関係の接点という映像作品の側面を考えた時、映像作家としてどのように関与するのか、あるいはしないのか、外部からのどのようなレスポンスを期待するのか、といった問題について、氏は『Tribology』がトライブル民族の存在をひろく紹介する目的で製作・発売・公開（クリップの短さはコピーおよびインターネット上で視聴・ダウンロードなどを行う際の利便性も考慮されている）されたことを強調した。その後、結果的に継続的な寄付や技術者の助けが得られ、更にトライブルの人びと自身が積極的に活動に関与するようになったが、製作者側が「記録の先」を意図的にコントロールするつもりはないという。現状のプレーンな記録を大前提に、音楽芸能をアイキャッチャー的に用いながら取っ付きやすく提示する方法から、映像作品全体を現地と外部との接面と捉える氏のスタンスがうかがい知れる。

研究者以外の人びと（テレビ関連、NGOなど）によって記録される映像と研究とのコラボレーションを未来に見据えての本研究会は、「音楽芸能」という語で照射される範囲のズレもあり建設的な議論には結びつかなかったものの、非常に示唆に富んでいた。プロの作家が素直に自分の耳目を引きつける対象を撮った作品が、その強度を以て、研究者による記録映像とは異なる文脈生成の契機となりうることは疑いようもない。記録による保存の動的な一経路として、このような映像の意義を検討するとともに、研究者が見たいと欲する「フレームの外」とは何であるのか、自身の研究視座を問い直すことも必要である。

（田村 菜々子 記）

* * * * *

東洋音楽学会 西日本支部 第251回定例研究会

日 時：2011年3月5日（土） 午後1時半～4時半

場 所：京都教育大学 藤森キャンパス 音楽演奏室

例会担当および司会：田中 多佳子（京都教育大学）

《特別企画》パンソリの魅力をさぐる

（1）講演

私のパンソリ研究

垣内 幸夫（京都教育大学）

〈要旨〉

これまで義太夫研究を行ってきたが、3年前から韓国の語り物音楽のパンソリに興味をいだくようになり、平成21～23年度の科学研究費「東アジアにおける語り物音楽の伝承並びに声の技法に関する比較分析研究」の補助を得て調査・研究を進めている。まだ、研究成果を発表できるような段階にはないが、あえて現状報告を行い生のパンソリ演唱や語り手の話を聞く機会を持つことによって、会員諸氏にパンソリの魅力を知っていただくとともに、広く意見や情報を得たいと思い本講演にいった。報告は以下の1～6の項目に分けて行った。

1. パンソリとは

日本語やハングルによるパンソリに関する主な文献をあげ、姜漢永『판소리 (パンソリ)』の序文からパンソリの定義を紹介した。「パンソリは私たちの伝統的で固有な劇芸術である。鼓手が打つ太鼓長短と機嫌取りに合わせ、一人多役の廣大（クワンデ）が辞説をその内容の劇的状況に合う楽想で演唱することによって、場を作り出す特異な総合芸術である。……」（세종대왕기념사업회, 1974/第二版 2000, 19頁, 垣内訳）

2. パンソリとの出会い

国立国楽院（ソウル市）における金美那完唱発表会（2008年3月22

日) で受けた衝撃が、パンソリへの興味に拍車をかけ、2008年9月にパンソリの故郷・南原を探訪した。本講演では春香テーマパーク、宋興祿(송흥록 1800~1863)の生家、南原国楽の聖地展示館などを画像とともに紹介した。

3. 全羅北道立国楽院・金美貞教授との出会い

2008年9月に金美貞教授から頂いた『東超制パンソリ人名録(동초제 판소리 인명록)』(오정숙(발행인) / 배기봉(기획), 사단법인 동초제 판소리 보존회, 2007)から次のような東超制の流れが明らかになった。創始者の金演洙(김연수 1907~1974)から弟子の呉貞淑(오정숙 1935~2008)→金美貞(김미정 1966~)→陳殷永(진은영 1991~)という4代にわたる東超制の伝承を音楽的に分析することが今後の重要な課題である。資料として東超制に関する先行研究、金景姫(김경희)『金演洙パンソリ音楽論(김연수 판소리 음악론)』(민속원, 2008)の「目次」(垣内訳)を配布した。著者の金景姫氏には平成23年度中にお会いする予定である。

4. パンソリの音楽的特徴

本講演に続く安聖民氏のお話と演唱を聞くための予備知識として、パンソリの7種類の長短(チャンダン)の楽譜を配布し、チュンモリについて口唱歌を実践した。また、主なパンソリの音楽的特徴を、「制(ジェ)」(流派としての音楽的な特性や伝承地域の特色による演奏様式)、「パディ」(個人の芸風に基づく演奏様式)、発声および声の技法、「チュイムセ」(掛声、相槌)、「ノルムセ」(身振り)の観点からまとめた。

5. 5名唱

5名唱(パンソリの5大ソリックン)を音源や資料とともに紹介した。5人の構成は文献によって異なる場合があるが、ここでは、金昌煥(1854~1927、西便制)、宋萬甲(1865~1937、東便制)、李東伯(1866~1947、中高制)、金昌龍(1872~1935、中高制)、丁貞烈(1878~1938、西便制)を取り上げた。

6. パンソリの歴史的音源資料について

現存する最も古いパンソリの音源に関する記述として「1896年7月24日、日本からアメリカに逃亡した7人の留学生中、3人がアメリカの人

類学者エリス・フレッチャー女史のアメリカ議会図書館の近所にある家で録音した6個のエジソン円筒型音盤が韓民族の最初の音盤である。」

(정창관著／崔秀蓮訳, http://www.heritagechannel.tv/storyzone/detail_03.asp?nP=1&id=435) が注目される。筆者は未見であるがこれらの復刻版CDが2007年と2009年に韓国で発売されている。また、日本語による最古のパンソリ録音の記述は、「朝鮮からは、韓寅五、官妓崔紅梅、外三名を大阪に呼び寄せて……」(山口亀之助『レコード文化發達史 第壹卷 明治大正時代初篇』録音文献協會, 1936, 103頁) というものであり、明治38(1905)年11月と翌年2月に録音されたと記されている。

(垣内 幸夫 記)

〈報告〉

日本の語り物研究を専門とする垣内氏が、韓国で伝承されている語り物芸能「パンソリ」とどのように出会い、現在まで、どのようにパンソリとかかわり、さらに将来にわたってどのようにかかわるつもりか、といった話しが中心となる講演であった。

講演の全体は、5部からなっていた。第1部は、初心者に向かってパンソリの基礎知識をあたえる部。第2部は、垣内氏が2008年、すばらしいパンソリの演奏にせし、憑かれたようにパンソリ研究をはじめた様子が、写真入りで紹介された。パンソリの中心地とされる南原を訪ね、伝承者を探し求め、歩き回ったあげくの果ての出会い、といった出来事が、写真をみせながら物語られた。第3部は、パンソリに憑かれた垣内氏が、実際に師匠についてパンソリのクラスに参加したときの状況が語られた。現地の人たちのリクエストに答え、義太夫の節を語ってみせるなど、交流の様子も紹介された。

垣内氏がついた師は、金美貞氏。氏は、その芸系をたどると、トンチョジェ(東超制)の系譜につらなる、演奏家であった。「制」とは、いわば流派のようなものである。パンソリには大きく分けて、東便制と西便制の区別があり、その外、垣内氏の配布資料によれば、一般には「バディ」と呼ばれる個人様式のレベルの伝承も、ときに「制」と呼ばれて

いるようである。先の金美貞氏の「東超制」は、まさにこの、個人様式のレベル（「バディ」のレベル）の「制」である。

そういった様式の違いについて研究するのが今後の課題であると述べた上で、第4部では、パンソリの音楽的特徴がざっと紹介され、第5部では、現在残されている歴史的音源についての概要が紹介された。配布資料の最後には、参考文献のリストもあって、有益であった。

2008年にはじめてパンソリの演奏に感銘をうけてから、わずか3年の間に、その芸につよくのめりこみ、資料をつぎつぎと探索し、芸を実際に習いにいって、その特徴をつかもうと情熱を傾ける姿に、レポーターは感銘を受けた。パンソリの様式の差に目をつけようとするのは、垣内氏がこれまで義太夫節の東風、西風といった様式のちがいについて研究を重ねてきたのと、同じ視点にもとづくものであり、これまでの蓄積と経験をふまえた上での展開が期待される。

義太夫とパンソリは直接の関係はむしろないと言うべきであろうが、「風」や「制」といった概念をつかいつつ、地域との結びつきの中で様式の区別をおこなうという行為自体には、何か共通性があるだろう、あるいはあるとみるべきだろうと、レポーターには感じられた。

垣内氏は、パンソリの外に、中国の語り物芸「ピンタン」（評弾）の調査も並行しておこなっておられるそうである。語り物の比較は、それぞれ使用される言語が違うこともあって、その比較研究は困難をきわめる。その困難をのりこえて、音楽研究の喜びを示し、新しい世界を切り開いてもらいたいと思った。

（藤田 隆則 記）

（2）パンソリ実演と講話

安 聖民（アン ソンミン） 鼓手：文 主継（ムン チュゲ）

聞き手：垣内 幸夫

〈報告〉

演者の安聖民氏は、大阪在住の在日3世であるが、日本での教育を受けたのち、韓国の漢陽大学で国楽を専攻している。音楽研究の盛んな漢

陽大学であるから、おそらく音楽学も学んでこられたものであろうと推察する。技法や様式についての明快な語り口が印象的であった。

パンソリの様式について、東便制は、おもに羽調にもとづき、西便制は界面調にもとづくといった音階の違いがあるなどといったおおまかな枠が示されたのち、垣内氏の講演の中でも簡単にふれられていた、いくつかの発声方法や声の技法、それからリズム型（長短）が、具体的にデモンストレーションされた。その後、〈水宮歌〉の一部分が披露された。

説明は実演をともなっていたので、わかりやすく有益であった。また、パンソリの実演にさいしては、パソコンで歌詞の訳が提示されるなどの工夫があったので、ありがたかった。

ちなみに、この講話は、10月に京都教育大学で開催される大会のイベント、あるいは、試行と位置づけられていた。関西の地において、韓国で生まれたパンソリが伝承者の努力によって、しだいしだいに根をおろしていく現場が存在することが実際にしめされたことによって、試行としては見事な成功であったと思われた。大会準備校の熱さは伝わった。秋の大会の内容充実も約束されたかのように、レポーターには感じられた。

(藤田 隆則 記)

* * * * *

■入会申し込み・住所変更について

(社) 東洋音楽学会への入会をご希望の方は、80円切手を同封し、下記の学会事務所へ入会案内・申込用紙をご請求ください。申込用紙は、ホームページからもダウンロードできます。会員の異動や住所変更等に

についても、下記の学会事務所へお知らせください (申し出先は支部事務局ではありませんのでご注意ください)。

社団法人 東洋音楽学会 学会事務所

〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号室

TEL: 03-3832-5152 FAX: 03-3832-5152

ホームページ: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/tog>

■研究発表の募集

西日本支部定例研究会での研究発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、FAX、E-mail)を明記の上、下記の西日本支部事務局までお申し込みください。

(社) 東洋音楽学会 西日本支部事務局

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1-2-1

神戸大学国際文化学研究科 寺内研究室気付

TEL: 078-803-7454 E-mail: naokotk@kobe-u.ac.jp

西日本支部だより 第69号

発行: (社) 東洋音楽学会 西日本支部 編集担当: 今田健太郎・志村哲

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1-2-1

神戸大学国際文化学研究科 寺内研究室気付

TEL: 078-803-7454 E-mail: naokotk@kobe-u.ac.jp

【編集後記】このたびの地震、津波などにて被害にあわれた皆さまにはお見舞いを申し上げます。会報でお知らせしているとおり、当学会の今年度大会は西日本支部の京都教育大学にて十月におこなわれる予定です。支部委員を中心にした実行委員会によって準備がすすめられておりますので、こんな時節ではありますが、どうぞご参加の心づもりをいただければ幸いです。